

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 10 月 20 日現在

機関番号：16301

研究種目：基盤研究(B) (海外学術調査)

研究期間：2013～2015

課題番号：25301030

研究課題名(和文) 家・家族・世帯の「家計」に関する日欧地域史の実証対比研究

研究課題名(英文) Budget of le, family and household: Historical empirical study for the paralleling and contrasting regions between Japan and Europe

研究代表者

高橋 基泰 (Takahashi, Motoyasu)

愛媛大学・法文学部・教授

研究者番号：20261480

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究計画は総体として、日本独自の歴史的存在である「家」が、欧州社会においても家族史の諸研究成果を活用し、生業の構造(家業・家産)すなわち「家計」に焦点をあてた実証的比較で理解可能となることを見出した。蔵開けにより発見された新史料データ分析を進めた結果、日本の長野県旧上田藩上塩尻村における「家計」形成が主要同族各家系の始まりとともに18世紀中葉であること、蚕種業の発展による経済的基盤がそれを可能としたことを証拠づけた。商品経済の進展を背景に欧州の家族・世帯では地域毎の偏差はありながらも消費経済の具体的変化が時系列上でたどりやすいが、家計の形成という点では日本の事例の方がより明確に現れる。

研究成果の概要(英文)：This research project finds that it is possible for European society to understand 'le' as Japanese original historical existence, by way of historical comparisons focusing on family budget. Throughout the project, the research team has found many unknown and untouched documents. The data from the newly found documents in Kami-shiojiri, Ueda, Nagano provide evidence of the formation of the family budget as well as the beginning of family branches of family unions in the mid-eighteenth century. The growth of the silkworm egg industry in the village and the area enabled this formation. By the development of the market economy, the European family and household show chronological changes in consumption with the regional or national variations, while the Japanese cases clearly express the formation of the family budget.

研究分野：西洋経済史

キーワード：家計 家・家族・世帯 地域経済 史的対比研究 史料発掘 旧上田藩上塩尻村 同族 日欧

1. 研究開始当初の背景

本研究は、基本的には基盤研究「西洋における『家』の発見：日欧対比のための史的実証研究」(平成22～24年度)の発展型である(本申請書11頁1)。本基盤研究では、独自の歴史的存在である家業・家産・家名の継承をおこなう日本の「イエ」を基点に、家の普遍的要素である直系家族・農業経営組織体・住居を準拠枠として、南仏ピレネー地域における文字通りの「家」の発見に始まり、中欧(ドイツ北部)および北欧(フィンランド)でも日本の「イエ」に匹敵する存在(「大きい家 Grand House」)を実証した。他方、家的要素の比較的希薄とされているスウェーデンやイギリスでも親族集団が、1つの村落や教区に限定されず、隣接地域全体で実体として検出可能なことも明らかにしている(Takahashi, ed., *Finding 'Ie' in Western Society: Historical empirical study for the paralleling and contrasting between Japan and Europe* (Matsuyama, 2013 March)。

一方で、上記「家の発見」プロジェクトの進展により、データ蓄積のみならず、国内外のセミナー・シンポジウムの累積・研究者間交流の緊密化・近接プロジェクトとの提携ならびに隣接学問領域における研究・データの互換を通じ、より多角高次元のアプローチが可能となった。それとともに、欧州全域とアジアあるいは国別の比較ではなく、地域特性に応じた「地域比較」ないし「地方比較」の視点が新たな問題を投げかける、という状況にあった。

2. 研究の目的

本研究の目的は日本および西ヨーロッパ社会において市場経済形成期に登場してくる農民の家・家族・世帯の「家計」に着目し、その形成史を明らかにすることであり、上記基盤研究「西洋における『家』の発見」の発展プロジェクトとして位置づけられるものである。市場経済化に対応する村落社会を「家計」の形成史として比較分析し、小農理論的把握では捉えきれない近代的市場経済社会出現の複雑なプロセスを復元する。

まず着手すべき点として、市場経済化に対応する日欧村落社会の変貌を村落に措定された「家」という基層部分の、特に家業と連動する「家計」に着目して比較分析する。上記基盤研究により、「家」は、系譜関係・農家経営・住居という普遍的要素を通して、南仏ピレネー・北独・フィンランドなどの周縁部分ではほぼ匹敵する存在を実証し、また地域単位で見ると、従来「家」の存在が希薄とされる国々においても地域単位で「家」の要素の幾つかは十分に見出せることを確かめた。これをふまえて、本研究計画は、近年の小農理論的把握では捉えきれない近代的市場経済社会出現の複雑なプロセスを、地域に枠組みを広げた上で家計という具体的な面から比較研究する。

そのため本研究は、1)市場経済形成期の日本および南東欧を含む西洋社会各地域における「家々」を家計の形成史という観点から歴史学的に再検討し、2)家・家族・世帯とそれらが属する「村」との連関を具体化し、3)「家計」の背景をなす生業の構造(家業・家産)に焦点をあてながら日欧における市場経済化の地域的特質について対比分析する。具体的には、網羅的に全国の文書館における蔵書目録を調査し、「家計」に関する文書の総ざらいをする。その上で、これまでの研究成果を活用し、モノグラフ・レベルで多角的に「家計」についての詳細な分析をする。これにより、「家」の生成にともなう家計形成の歴史が叙述されることとなる。

3. 研究の方法

【研究技法】

対比研究法を用いる。この方法は、相互の独自性を認めたとし、相互の相違・共通性を発見していこうという問題意識に由来する。研究対象とその研究者双方にその姿勢が適用される。したがって通常の比較法のような対象同士に異なる特徴を見出す姿勢はとらない。異なる国・文化を背負う研究者同士における異文化コミュニケーションを前提にする研究技法である。

主要作業は、既存データの新たな観点からのとらえ直しである。まず、網羅的に全国の文書館における蔵書目録を調査し、「家計」に関する文書の総ざらいをする。その上で、モノグラフ・レベルで多角的に「家計」についての分析をする。これについてはすでにデータの揃う対象を優先的に扱うことで効果的な分析が期待できる。したがって基本は、文献資料に基づく伝統的な歴史研究だが、同時に以下の独自の分析新技術を用いる。

1)日欧高次統合家計データベースの作成：日英の社会経済史情報データベース(宗門改帳DB、教区登録簿DB、史料画像DB、遺言書DB等)を基礎にし、家計に焦点をおく対比研究に耐える柔軟さ・可変性を加味したものを作成する。

2)家計に関する歴史用語および学説データ系統譜の生成：主に英語を用いて、各国の家計に関するグロスリー(歴史用語集)を歴史的文脈と学説史とともにデータベース化する。

3)住居の歴史情報蒐集・検証のための現地実態調査：(1)を基礎データにして国際比近世・近代期日欧村落社会における住居史の資料収集・現地実態調査をおこなう。

【調査対象地域】

日本の「イエ」と「ムラ」を基点として西洋における家族・世帯を村落社会経済史の文脈で読み返す際に、前基盤研究で「家」に相等する存在を実証済みの対象地域と対比しながら、コミュニティ研究蓄積の厚いイギリスに重点を置く。

基点対象地域：日本（長野県上田市上塩尻および関連地域）

重点対象地域：イギリス（ケンブリッジ州ウィリンガム教区および近隣地域一帯）

対比対象地域 1：ドイツ（北西部：ニーダーザクセン地方ならびにチェコ・チェヴォーニ地方）

対比対象地域 2：フィンランド（中西部）

対比対象地域 3：イタリア（北中部地方・ポー川流域）

対比対象地域 4：スウェーデン（東中部ウステルユートランド地方）

対比対象地域 5：フランス（北部：シャンパーニュ地方近郊農村、南部：ピレネー地方）

4. 研究成果

【2013 年度】

本研究の目的は日本および西ヨーロッパ社会において市場経済形成期に登場してくる農民の家・家族・世帯の「家計」に着目し、その形成史を明らかにすることである。その基礎作業として、本年度は、本テーマの近世・近代期日欧農村社会における「家計」形成史について、現時点での研究水準を探った。また、平行して本研究の重要な基礎となる日欧高次家計データベースと住居の建築史資料・現地実態調査を実施した。6月初めに研究実施の事前研究会を開催し、その後、累積研究会を開催した。場所は主に東京で行ったが海外出張時には現地でも開催した。研究成果を比較検討するための公開セミナーは、イギリス・ケンブリッジ大学の海外研究協力者である Craig Muldrew および Janine Maegraith 両博士、2人の招へい研究者の来日に合わせたため、年度を超し4月初旬となった（前者は短期招へい制度による。受入研究者：高橋）。また、通常はヨーロッパ社会科学史学会（オーストリア・ウィーン大学）も4月ではあったが、本研究テーマによるセッションを開催した。また申請者は別のセッションで日本の事例報告（旧上田藩領上塩尻村の人口移動と女性労働力）を行った。さらに家計と消費経済との観点から、8月に国際農業史学会（スイス・ベルン）において日本との対比という立場で英国沼沢地縁り地域における経済活動について報告した後、ドイツ・ミュンヘン市近郊農村を巡検した。また、オランダおよびフィンランドにおける野外博物館を視察した。さらに、11月にケンブリッジ大学にて行われたヨーロッパ消費経済史研究ネットワークの研究会に参加しヨーロッパ全体の研究動向を探り、さらに2月にはスウェーデン・ユテボリ大学で専門家のレビューを受けた。加えて、『国際比較研究』第10号および日英の研究成果を叢書（愛媛大学経済学叢書 18・19）として出版した。

【2014 年度】

年度の初めから学術振興会海外研究者短期招へいにより本科研費の海外共同研究者であるケンブリッジ大学歴史学部クレイ

グ・マルドルー博士、および科研費によりケンブリッジ大学ニューナム・カレッジ、ジャーネ・マエグレース博士を招へいし、異なる国・文化を背負う研究者同士の対話・異文化コミュニケーションをすすめるとともに、日本の「現地」に触れることで発現する知見の提供を受けた。それに続き、ウィーンで開催された第10回 ESSHC（European Social Science History Conference ヨーロッパ社会科学史学会、4月23日～26日）において成果研究報告および本題目によるセッションを組織した。その成果の一部は現在ヨーロッパの出版社からの出版を目指し、現在編集集中である。国内でも、全国学会3つにおいて、報告・シンポジウムの組織をおこなった（1. 高橋基泰「市場経済形成期の氾濫頻発村落社会：新潟県新潟市西蒲原区中郷屋村イギリス経済史の観点から対比研究的コメント」2014年社会経済史学会全国大会（同志社大学）パネル・ディスカッション；2. 高橋基泰「英国沼沢地縁り地 - 帯における治水と防水の共同性 - ケンブリッジ州ウィリンガム教区沼沢地役人会計記録を中心に」日本村落研究学会 第62回大会（宮古）・自由報告、11/1；3. ミニ・シンポジウム「家計と消費 趣旨説明およびヨーロッパにおける研究動向」比較家族史学会秋季研究大会（愛媛大学）、11/15。）年度末には、研究成果の一部を『日英村落共同墓地史的対比研究』（愛媛大学経済学研究叢書 20、1-281頁（2015年3月））として公刊している。

【2015 年度】

2015年度は最終年度ということで、成果公表に注力した。まず、海外共同研究者の招へいを4月に学術振興会海外研究者短期招へい受入れ研究者として、フィンランド・ヘルシンキ大学社会経済史学部 Beatrice Moring 博士（4月10日～28日）および7月、英国ケンブリッジ大学歴史学部 Leigh Shaw-Taylor 博士を招へいした。この前者の受入中、長野県上田市上塩尻村の現地共同調査をおこなった。その際、蚕種業の中心であった佐藤藤本善右衛門家は長らく外部の者には閉ざされてきたが、2月に最後の当主が没し開放されたことを世話人・佐藤隆一氏の案内で知り、蔵を含め家屋の内部調査を行い、最後の未見史料群を発掘した。他方、6月には、招待講演（英国ローハンプトン大学、故マーガレット・スパフォード名誉教授追悼記念学会、6月19日）、さらに国際学会（国際農業史学会 International Rural History Conference：スペイン・ジローナ）においてパネル 49 を組織し（Famine and the village society in the context of international comparison: Revisited）報告した（9月8日）。これらの調査活動および成果公表中におこなった議論の中で、旧上田藩上塩尻村において、18世紀中葉蚕種業の発展とともに同族・家も生成されたことを史料により裏付け、プロジェクトの結論を導いた。その観点は、今後とくに

イタリア方面でも対比可能であるという展望を得たことも成果として挙げられる。また、3月に拙著『イギリス検認遺言書の歴史』(東京経済情報出版、2016年3月1-256頁)、『近世英国社会経済慣行史論』(愛媛大学経済学研究会叢書21、2016年3月)1-200頁を公刊した。さらに2014年に中間報告としておこなった比較家族史学会ミニ・シンポジウム(愛媛大学)の特集を『比較家族史研究』第30号として誌上で2016年6月に公刊している。

【総じて】

本研究計画は、日本独自の歴史的存在である「家」が、欧州社会においても家族史の諸研究成果を活用し、生業の構造(家業・家産)すなわち「家計」に焦点をあてた実証的比較で理解可能となることを見出した。蔵開けにより発見された新史料データ分析を進めた結果、日本の長野県旧上田藩上塩尻村における「家計」形成が主要同族各家系の始まりとともに18世紀中葉であること、蚕種業の発展による経済的基盤がそれを可能としたことを証拠づけた。商品経済の進展を背景に欧州の家族・世帯では地域毎の偏差はありながらも消費経済の具体的変化が時系列上でたどりやすいが、家計の形成という点では日本の事例の方がより明確に現れる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 8 件)

高橋基泰、「総論：家計と消費」、『比較家族史研究』30、査独有、2016年、4-21頁。

長谷部弘、「農村社会の市場経済化と家業・家計の形成—上塩尻村佐藤善右衛門の事例から—」、『比較家族史研究』30、査独有、2016年、22-49頁。

山内太、「原一族における家業・家計の形成と継承」、『比較家族史研究』30、査独有、2016年、50-67頁。

岩間剛城、「馬場家の家計と蚕種取引」、『比較家族史研究』30、査独有、2016年、68-86頁。

村山聡、「家計が持続する名望家層と多出する無産者層—近世ドイツ・ヴッパー渓谷における人口危機とその帰結—」、『比較家族史研究』30、査独有、2016年、87-106頁。

佐藤睦朗、「18-19世紀スウェーデンにおける家産継承と親族」、『比較家族史研究』30、査独有、2016年、107-122頁。

佐藤睦朗、「18-19世紀のフェーダ教区における農業景観」、『経済貿易研究』40、査独有、2014年、79-96頁。

長谷部弘、「村の再編—近世村落から近代村落へ—」、『村落社会研究 第50集 町村合併と村の再編』、農文協、査読有、2014年、35-72頁。

〔学会発表〕(計 18 件)

Motoyasu Takahashi, Budget of family and household: an empirical historical study for the paralleling and contrasting of regions in Japan and Europe, After Margaret Spufford: English Local History Now, University of Roehampton, UK (招待講演。国際学会) 2015年6月19日、Roehampton Univ. London, London (United Kingdom)

Motoyasu Takahashi, Introduction for Famine and the village society in the context of international comparison: Revisited, International Rural History Conference 2015, Girona, Spain (国際学会) 2015年9月8日、Girona (Spain)

Yoshiyuki Murayama, Climate and agricultural conditions for Tenpo lean harvest in Kami-Shiojiri Village: Revisited, International Rural History Conference 2015, Girona, Spain (国際学会) 2015年9月8日、Girona (Spain)

Futoshi Yamauchi, Tenpo bad harvest and the agriculture structure in Kami-shiojiri village, International Rural History Conference 2015, Girona, Spain (国際学会) 2015年9月8日、Girona (Spain)

Hiroshi Hasebe, The Historical Analysis of durable power to the Tenpo Famine: a case study of Kami-shiojiri village, International Rural History Conference 2015, Girona, Spain (国際学会) 2015年9月8日、Girona (Spain)

Motoyasu Takahashi, Migration and Family Continuity in Kami-shiojiri village, Ueda, Nagano, Japan in the later 18th and 19th centuries, 10th ESSHC (European Social Science History Conference), Wien (国際学会), 2014年4月23日、Wien University, Wien (Austria)

Motoyasu Takahashi, Introduction for Budget of family and household: an empirical historical study for the paralleling and contrasting of regions in Japan and Europe, 10th ESSHC (European Social Science History Conference), Wien (国際学会), 2014年4月23日、Wien University, Wien (Austria)

Shoko Hirai, Household Continuity and Migration in Japanese Farming Villages, 10th ESSHC (European Social Science History Conference), Wien, (国際学会) 2014年4月23日、Wien University, Wien (Austria)

Satoshi Murayama, Regional

Demographic Changes Caused by Natural and Human Disasters in Early Modern Times, 10th ESSHC (European Social Science History Conference), Wien, (国際学会) 2014年4月23日、Wien University, Wien (Austria)

Hiroshi Hasebe, The Formation of 'Ie' and 'Family Budget', 10th ESSHC (European Social Science History Conference), Wien(国際学会), 2014年4月23日、Wien University, Wien (Austria)

高橋基泰、市場経済形成期の氾濫頻発村落社会：新潟県新潟市西蒲原区中郷屋村イギリス経済史の観点から対比研究的コメント、2014年 社会経済史学会全国大会、2014年6月2日、同志社大学(京都)

高橋基泰、英国沼沢地縁り地帯における治水と防水の共同性 - ケンブリッジ州ウィリンガム教区沼沢地役人会計記録を中心に -、日本村落研究学会 第62回大会・自由報告、2014年11月1日、グリーンピア三陸みやこ(宮古市)

高橋基泰、ミニ・シンポジウム家計と消費・趣旨説明およびヨーロッパにおける研究動向、比較家族史学会秋季研究大会、2014年11月15日、愛媛大学(松山市)

長谷部弘、佐藤善右衛門家の蚕種経営と家計-上塩尻村の家々における「家計」の成立-、比較家族史学会秋季研究大会、2014年11月15日、愛媛大学(松山市)
岩間剛城、馬場家の家計と蚕種取引、比較家族史学会秋季研究大会、2014年11月15日、愛媛大学(松山市)

村山聡、家計が持続する名望家層と多出する無産者層-近世ドイツ・ヴッパータールにおける人口危機とその帰結-、比較家族史学会秋季研究大会、2014年11月15日、愛媛大学(松山市)

佐藤睦朗、スウフェーデン農村史における「親族ネットワーク」と「家計」に関する研究動向、比較家族史学会秋季研究大会、2014年11月15日、愛媛大学(松山市)

Motoyasu Takahashi, Communal Organisations in the English Fen-edge Area: for a Study of Historical Parallel and Contrast with the Warichi (Land Distribution) System in Echigo, Japan 国際学会、2013年8月21日、Bern(Switzerland)

〔図書〕(計 6 件)

高橋基泰、『イギリス検認遺言書の歴史』東京経済情報出版、2016年、1-256頁。

高橋基泰、『近世英国農村社会経済慣行史論』愛媛大学経済学研究叢書21、2016年、1-199頁。

高橋基泰、『日英村落共同墓地史の対比研究』愛媛大学経済学研究叢書20、2015年、1-282頁。

高橋基泰、『近世英国沼沢地縁り教区農事暦・人物誌』愛媛大学経済学研究叢書19、2014年、1-164頁。

高橋基泰、『旧上田藩上塩尻村同族・分家誌』愛媛大学経済学研究叢書18、2014年、1-213頁。

Motoyasu Takahashi, ed., *Finding 'Ie' in Western Society: Historical empirical study for the paralleling and contrasting between Japan and Europe* (Matsuyama, 2013 March) (編著、内論稿は、) Motoyasu Takahashi, 'Family Name and Family Continuity: in the context of Kin Relationships in Kami-shijojiri, Nagano, Japan' (pp.63-93) .

〔産業財産権〕
出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
<http://www.cpm.ehime-u.ac.jp/MotoHomePage/Budget%20of%20Ie,%20family%20and%20household.html>

6. 研究組織
(1)研究代表者
高橋 基泰 (MOTOYASU TAKAHASHI)

愛媛大学・法文学部・教授
研究者番号：20261480

(2)研究分担者
平井 晶子 (SHOKO HIRAI)
神戸大学・大学院人文学研究科・准教授
研究者番号：30464259

(3)連携研究者
村山 聡 (SATOSHI MURAYAMA)
香川大学・教育学部・教授
研究者番号：60210069

モリス マーティン (MARTIN MORRIS)

千葉大学・大学院工学系研究院・教授

研究者番号：20282444

長谷部 弘 (HIROSHI HASEBE)

東北大学・大学院経済学研究科・教授

研究者番号：50164835

村山 良之 (YOSHIYUKI MURAYAMA)

山形大学・大学院教育実践研究科・教授

研究者番号：10210072

山内 太 (FUTOSHI YAMAUCHI)

京都産業大学・経済学部・教授

研究者番号：70271856

平井 進 (SUSUMU HIRAI)

小樽商科大学・商学部・教授

研究者番号：30301964

佐藤睦朗 (MUTSUO SATO)

研究者番号：90409855

神奈川大学・経済学部・准教授

岩間 剛城 (KOUKI IWAMA)

近畿大学・経済学部・准教授

研究者番号：30534854